

クルマエビ養殖における疾病対策と発生時期							
(要約)平成13年から17年のクルマエビ養殖における疾病対策の件数は134件で、最も多かった疾病はビブリオ病であった。また、主な疾病の発生時期はPAVは6月～10月、ビブリオ病は7月～10月、フサリウム症では3月～4月と6月、そしてツリガネムシ症は8月～9月であった。							
水産海洋研究センター 海洋資源・養殖班					連絡先	098-994-3593	
部会名	水産業部会	専門	水族病理	対象	クルマエビ養殖	分類	指導
普及対象地域							

[背景・ねらい]

沖縄県におけるクルマエビ養殖は、平成10年にPAVにより大きな被害を受けたことから、PAV対策が重要な課題であった。しかし、近年はPAVに対するPCR検査の強化によるウイルス侵入防止及びウイルスに感染していない養成母エビからの種苗の普及によってPAV診断件数は著しく減少した。一方、細菌性疾病のビブリオ病と真菌性疾病のフサリウム症は近年多発おり、産業的にも大きな被害を起こしている。そこで、魚病の被害を軽減するために、種苗生産や養殖時に発生する疾病の種類、時期を調べ、有効な対策を指導することによって、クルマエビの安定生産に寄与することを研究の目的とした。

[成果の内容・特徴]

- 1.平成13年から17年のクルマエビ養殖における疾病の対策件数は6件～76件の範囲と年による変動が大きく、合計では134件であった(表1)。
- 2.対策件数の多かった疾病はビブリオ病の70件で全体の52.2%を占めた。次にフサリウム症の34件25.4%、そしてPAVとツリガネムシ症がそれぞれ11件8.2%の順であった(表1)。
- 3.PAVの対策件数は平成10年の38件をピークに減少し、13年から17年の対策件数は0～4件の範囲で推移した。それに対してビブリオ病は15年までは1～4件であったのが、16年に15件、17年には48件と急激に増加した。同様にフサリウム症も15年までは1～3件であったのが、16年に7件、17年に18件に増加した(表1)。
- 4.クルマエビ養殖における主な疾病であるPAVは6月～10月、ビブリオ病は7月～10月、フサリウム症は3月～4月と夏エビ出荷による6月、そしてツリガネムシ症は8月～9月の発生が多かった(表2)。

[成果の活用面・留意点]

- 1.疾病の種類を明らかにすることによって、適切な水産医薬品の使用と有効な対策を指導することができ、安心安全な養殖魚の生産と魚病による被害を軽減化できる。
- 2.疾病の早期発見によって、魚病被害のまん延を防止できる。
- 3.疾病が発生しやすい時期にはビタミン剤の強化、換水率の増加、底掃除の徹底、そして魚病の早期発見に努める必要がある。

[具体的データ]

表1 平成13年から17年のクルマエビ養殖における疾病対策の件数

疾病の種類	疾病名	疾病対策件数					合計	疾病に占める率 (%)
		平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		
ウイルス性疾病	PAV	4	0	1	4	2	11	8.2
細菌性疾病	ピブリオ病	1	4	2	15	48	70	52.2
真菌性疾病	フサリウム症	3	3	3	7	18	34	25.4
寄生虫性疾病	ツリガネムシ症	0	0	0	3	8	11	8.2
	9.7% 鞭毛虫症	1	1	0	0	0	2	1.5
その他	餌料性疾病	0	5	0	0	0	5	3.7
	4.5% 酸欠症	1	0	0	0	0	1	0.7
合計	合計	10	13	6	29	76	134	100.0

表2 クルマエビ養殖における主な疾病の発生時期(平成13年～17年)

疾病名	クルマエビの疾病発生時期(月)												合計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
PAV	0	0	0	0	0	1	4	2	0	4	0	0	11
ピブリオ病	1	1	6	0	1	5	11	11	12	9	6	7	70
フサリウム症	2	2	5	10	0	5	3	2	0	1	1	3	34
ツリガネムシ症	1	0	0	1	0	0	0	4	3	0	1	1	11

[その他]

研究課題名：養殖魚介類の耐病性試験

予算区分：県単

研究期間：平成13年度～平成17年度

研究担当者：玉城英信・中村博幸・杉山昭博・小澤明子

発表論文等：平成13年～17年度 沖縄県水産試験場事業報告書